

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

中村 成里

2019年の学界状況は、国語教育、とりわけ古典教育について話題沸騰した。2019年1月に行われたシンポジウム(於明星大学)をまとめた勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信 2019年9月)は、中等教育の現場における古典教育への現状が可視化され、存在意義を公の場で問われた出来事でもあり、「なぜ古典を勉強しなければいけないのか」という疑問を直截突きつけられる時代の到来を告げた転換点となろう。

さて、上代では、『万葉集』六五一、六五二番歌について、さほど顧みられてこなかった「露霜」の置く景の表現の検討をもとに、「露霜置きにけり」の景を「季節の推移ではなく時間の経緯を示す、男女の恋慕に関わる景」として位置づけた、井ノ口史氏「「家なる人も待ち恋ひぬらむ」——『万葉集』巻四、大伴坂上郎女の六五一番歌の解釈をめぐって——」『上代文学』(123号、2019年11月)、これまで議論の決着を見なかった「言向」を「言葉によって向ける(平定する)」意と改めて定義して、『古事記』における天孫降臨以前の「草木のさやぐ世界」すなわち「言語なき世界」を「平定し、秩序化する行為」と規定し、世界を支配するための言葉——表現が『古事記』の有する思想へと結びつく回路を論じた松田浩氏「『古事記』における「言向」の論理と思想」(『上代文学』123号、2019年11月)などがある。

中古・中世は、「ながむ」について、思

念や心のあり方を「見ること」によって把握し、この営為を象徴する語として捉える板野みずえ氏「新古今時代の和歌における「ながむ」」(『國語と國文学』通巻96、3号、2019年3月)、金源三説話にみられる「わがひのもと」を端緒として室町期歌学の様相へと論を展開していく館野文昭氏「「わがひのもと」という詞——金源三和歌説話を起点として室町期の歌学知を探る——」(『國語國文』通巻88、4号、2019年4月)、『源氏物語』の接頭辞「御」がどこまで係るのかという視点から、「御」の係る範囲の伸縮性を述べた鴻野知暁「接頭辞「御」の係る範囲について」(『むらさき』56輯、2019年12月)など、ユニークで意欲的なアプローチを試みる論文が散見される。

また、諸本の表現の差異と和歌の機能を述べた、松尾葦江氏「『平家物語』の表現——叙事に泣くということ——」(『和歌文学研究』118号、2019年6月)、「とか」「とかや」の文末表現から語感を捕捉していく野本東生氏「宇治拾遺物語への視覚——「とか」「とかや」をめぐって」『國語と國文学』(通巻96、9号、2019年9月)もある。

古典文学における研究方法は、考証や文献学、また物語などの解釈に及ぶものなど多岐にわたるが、表現研究は独立して存在するものではなく、書誌学や作品の解釈にも有機的に結びついていることを改めて認識した。

最後に、上代から中古・中世を中心とした時評となったことをご寛恕願いたい次第である。

(明治大学)